
小児がんにおける放射線治療の役割

小児がんでは、手術、抗がん剤治療や放射線治療等が行われます。

多くの小児がんに共通する性質として、抗がん剤や放射線治療の効果が得やすい、手術によって臓器を大きく取り除くことが、難しいといったことがあげられます。そのため小児がんでは、手術、抗がん剤治療や放射線治療の長所を生かした「治療の組み合わせ」が行われます。

手術はがん細胞の塊である腫瘍を取り除きます。抗がん剤は、腫瘍だけでなく、体全体に散らばっているがん細胞を減らします。放射線治療は腫瘍の周囲に多く残っているがん細胞を消滅させ、再発を抑えます。小児がんの治療では病気の広がり具合に応じて、これら三つの治療の特長を生かすことで、治癒成績が向上してきました。小児がんの放射線治療は腫瘍の周囲からのがんの再発を抑えることを目的としていることを、しっかりと理解する必要があります。

放射線治療の目的がしっかりと理解できていないと、その放射線治療が本当に必要なのか判断できません。病状によっては、重い副作用を受け入れてまで、行うべき治療なのかわからなくなってしまうかもしれません。

抗がん剤治療で小さくなった病巣に対する放射線治療や、手術で摘出した後の放射線治療を「念のためにやる治療」、「本当は必要ないかもしれない治療」と理解されている方がいます。しかし「抗がん剤治療の効果があつたかどうか」や「手術で摘出できたかどうか」だけで放射線治療を避けられることは多くありません。最善の治療効果を得るために、がんの再発の可能性が高い場所には、それを抑えるだけの治療が必要だということを、理解して、放射線治療が必要かどうかを考えてください。

放射線治療の副作用について

現在、がんの治療を受ける方の約4分の1は放射線治療を受けていると言われています。放射線治療はがんの治療において大きな役割を担っており、身近なものになっています。しかし放射線という言葉聞いた時、災害による放射線被ばくのことを頭に浮かべるかもしれません。これまで放射線による健康被害は、こういった災害で被ばくされた方のデータをもとに理解されてきました。

このようなデータは年齢や性別を問わない住民全体から得られており、全身的な被ばくの影響を示すものです。そのため放射線治療のように、特定の年齢の特定の病気をもっている患者さんに起きる変化や、体の一部の臓器が照射されたときの放射線の影響を理解したり、予測するのには適していません。

2010年ころから、小児がんに対して放射線治療を行って30年以上経った患者さんのデータベースが活用できるようになりました。これらのデータベースに含まれる詳細な臨床的な情報を分析することで、患者さん、特に小児がんの患者さんに行った放射線治療の副作用をより正確に理解し、予測できるようになっています。

放射線治療の副作用を知ることの大切さ

放射線治療による副作用の種類や程度は照射される臓器の線量によって決まります。照射される臓器や臓器の線量は、治療をする病期の部位、治療の範囲、治療の方法によって変わってきます。ですから放射線治療による副作用は、患者さんごとに異なります。

放射線治療医は、照射される臓器の線量から予想される副作用種類や程度を考慮して、治療方針を決めます。患者さんや患者さんの家族が、このような予想される副作用の種類や程度を理解することは、小児がんの治療を円滑に進めるのに役立ちます。

副作用の種類や程度を理解していないために、放射線治療の副作用を漠然ととらえたり、過大にとらえたりすることがあります。その結果、受け入れられるはずの放射線治療を拒否するといったことも懸念されます。また副作用に関する不要な不安やストレスを感じることとなります。

放射線治療のよる副作用を正確に理解することは、治療中に現れた副作用が予想された範囲であると認識し、その後の経緯についての不安を減らすことにつながります。また副作用が現れる前に予防したり、早期に発見して、早く治療が始められるということも、放射線治療による副作用を理解するメリットといえます。

放射線治療の副作用は、長期にわたり日常生活に影響を及ぼすものがあります。これにどのように向き合うかは、いろいろな考え方があります。患者さんや家族の一部だけで悩むのではなく、ご家族が一緒になって、副作用への向き合い方を考えることをお勧めします。